

如何なる美術館が必要か？ (下)

黒田清輝

斯の如く總て其の向き／＼によつて急設を要するのであるが、私の理想と假りにいふ可きものは、總ての物が欲しいのである。その中でも第一位に置かねばならぬのは、我國の美術品に對する美術館である。即ち一番美術の本尊になるべき新古美術館を建設する事である。新古といふ二種類を一緒にして居るが、出來得べくんば別々な館であつて欲しい。何れがより以上必要であるかと言へば、先づ一番保存し難く、且つ亡失し易い古美術品を尊ばなければならぬと思ふ。これを吾々の平生生活に就いて考へて見れば、兎角吾々はけちな借屋住居にしても、住むのにそれ程耐へられぬといふ事もないやうであるが、自分の祖先の墳墓がないといふ事は耐へられぬ事である。目下の状態はその墳墓の地さへないといふ有様であるから、先づ墳墓を修めて後自分の住宅に及ぼしては如何かとも考へる。然しながら祖先にも比すべき大美術館の建設は財政上甚だ困難であると思ふから、或は靜かに時機を待つより外はないかも知れない。

扱て先頃からの美術館建設問題に就いての相談會にも私は出席して大体の諸氏みなさんの考へも聞き又私の意見も述べた。私は個人として、特に理想としては大美術館の出現を希望するものである。然し相談の結果、近代及將來の美術を奨励する爲めの美術館といふやうな決議になつた。私はこれも決して賛成しない理由わけではない。何れにしても我國にとつては總て必要の一部である。今は建築物の前後を争つてゐる時代ではあるまい。何でもよい、各

種の必要な美術館の中の何物かゝ出来れば、夫丈國家の爲めにも幸となるのである。

兎に角諸君の御盡力によつて此處に美術の展覽會場が出来るといふ事は誠に慶すべき事である。然しそれと同時に其の他の祖先の墳墓にも比すべき美術館の建設といふことは、決して忘れて貰ひたく無いのである。

それから古い美術品陳列場たる所は現に皇室博物館があるではないか、今は其の必要はあるまい、といふ説もあらう。成程急設は要さないかも知れぬが、元來博物館は皇室の寶庫であつて、普通の美術館とは趣を異にして居るものだと聞いてゐる。それ故に皇室博物館の事は別物として考へたいのである。必ずこれ以外に日本國立の美術館が無くてはならぬものと信ずる。

今日の處では諸君の大多數の希望せらるゝ現代及將來の爲めの美術館の建設が最も急務であるとの一般の意嚮であるから私もそれに大いに賛成の意を表する次第である。而して一日も速に建設されん事を希望するものがある。

要するに、私は各種の美術館の出来るといふ事を以て理想とする、其の内で何が重なるものであるかと言へば、古來より近代までの美術品を蒐集し、その陳列する大美術館の出現である。然しながらこれは私が美術そのものを大きく全體から見た理想であつて、今日の時期に急務を要するのは展覽會場であるからこの點に於て美術館建設既成同盟會の主旨に大いに賛成して居るのである(談) (完)

大正七年三月、田口掬汀(鏡次郎)らの斡旋により衆議院議員鶴沢聡明らが提出した帝国美術館建設に関する建議案が衆議院にて可決される。これを受けて同年一月には国民美術協会が文部大臣へ建白書を提出、またこれと前後して東京都下の新聞雑誌記者の呼びかけにより美術館建設期成同盟会が発足するなど、美術館建設へ向けての機運が高まっていた。「美術館建設運動の経過」(本書六五～六六三頁)は、一月二六日に行なわれた美術館建設期成同盟会の発起人総会議事録であり、ここで黒田は古代から現代までの美術館と展覧会場を包括した施設を要求すべきと理想論を展開するが、結局現代美術の常設展示と展覧会場を前面に押し出した有島生馬の案が現実路線として採択されている。「美術館建設の提唱 如何なる美術館が必要か？」(本書六四七～六五二頁)は翌二月六日から二四日にかけて『読売新聞』に掲載された坂井犀水・正木直彦・高村光雲・山本鼎・有島生馬・岡精一・黒田清輝による連載記事で、黒田は同月一九日に読売新聞記者清水太郎の取材を受け(『黒田清輝日記』第四巻)、美術館建設期成同盟会の発起人総会とほぼ同様の趣旨を語っている。

美術館建設期成同盟会は翌大正八年も引き続き活動を続けたが、同年二月の閣議で美術館建設の予算が削除されると、その運動は一気に収束することとなる。この一連の動向については、小林未央子「展覧会場と山本鼎——大正七年から八年にかけての美術館期成運動をめぐって」(『東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版平成十七年五月)を参照。